

第1節 播磨町の特性

1 小さくて若い町

本町は 明治22年の町村制施行に際し「阿閉村^{あへえ}」として誕生し、昭和37年に兵庫県最後の村から名称を改め、町制を施行した。位置は、兵庫県南部の中央で、神戸市中心からは直線距離で約30km西の臨海部にあり、南は瀬戸内海、東は明石市、西と北は加古川市に隣接している。面積は、9.09km²と県下ではもっとも小さな町で、その3割は海を埋め立てて造られた人工島である。

一方、人口は、平成12年4月1日現在で34,853人（住民基本台帳・外国人登録）と県下の町ではもっとも多く、また、65歳以上人口の総人口に占める割合である高齢化率を見ると、12.5%と県下の町ではもっとも低くなっており、若い町である。

2 東播磨臨海部に位置する交通の要所

広域幹線道路として、東西に国道250号（明姫幹線）が町の中央に、臨海部には県道明石高砂線が通じている。また、国道2号及び加古川バイパスとも隣接している。

一方、鉄道では、JR山陽本線、山陽電鉄が東西方向に走り、JR土山駅、山陽電鉄播磨町駅があり、神戸市、姫路市などへの交通の便は良好である。また、明石海峡大橋の開通などにより、道路交通網はさらに整備・充実され、阪神地域と中核都市である姫路市の中間に位置する本町は、極めて交通の利便性の優れた地域にある。



明姫幹線(大中交差点)



臨海工業地帯(新島)



国指定史跡「大遺跡」

3 臨海工業の町

農業・漁業は、全般的に縮小傾向にあるが、工業は、東播磨臨海工業地帯の一角に位置し、製造業が町の基幹産業となっている。主要製品は、金属製品、化学工業品、一般機械器具であるが、新たな技術の開発や新分野への展開が求められてきている。

一方、商業は、小売業が中心で販売額は増加しているものの、近郊の大規模店舗の進出により、環境は厳しくなっている。

また、重要港湾として2つの公共埠頭があり、東播磨内陸部への海の玄関口として、大きな役割を果たしている。

4 歴史と文化の町

本町は、大中遺跡に見られるように、古代にさかのぼる古い歴史を有した町である。奈良時代に書かれた「播磨国風土記」において、「阿閉村」の由来が記載されており、万葉集にも詠まれている。

また、本町は、江戸時代の明暦2年、干ばつに苦しむ地域を救うため、約14kmの新井用水路^{しんず}を開削した今里傳兵衛や、幕末の日米外交界で活躍し、後に日本で最初の新聞「海外新聞」を発刊し、新聞の父と呼ばれるジョセフ彦の生誕地でもある。

主な史跡 文化財としては、弥生時代中期から古墳時代中期を中心とする大規模集落群跡である国指定史跡「大中遺跡」、県指定文化財である古墳時代中期の円墳「愛宕塚古墳」、4つの社が軒を近接して並立する特色ある社配置を持つ「阿閉神社本殿」があげられる。

5 自然の残るやすらぎの町

本町は、平坦な地形で、町のほぼ中央部に喜瀬川が流れ、瀬戸内海に至っているほか、雨の少ない気候のため随所にため池が見られ、野鳥が多く生息している。また、町内には田園風景が残り、やすらぎとうるおいを演出している。